

# カンボジア和平の実現と 文化の再興

今川 幸雄





# カンボジア和平の実現と 文化の再興

今川幸雄

名古屋大学法政国際教育協力研究センター

2013年3月



# 目次



1. はじめに.....	6
2. 第二次世界大戦終了後のカンボジア .....	9
3. カンボジア和平パリ協定の成立.....	16
4. 国連の平和維持活動 .....	29
5. カンボジア和平への日本の貢献.....	36
6. クメール文化復興と日本の貢献.....	40
7. 質疑 .....	43



本書は、2012年10月25日に名古屋大学法政国際教育協力研究センター  
において行われた講演の記録である。

# 1. はじめに

---

---

## ○司会 定形衛・名古屋大学大学院法学研究科長

本日は、1992年から駐カンボジア日本国特命全権大使を務められました今川幸雄先生をお招きして、「カンボジア和平の実現と文化の再興」というタイトルで、お話ししていただきます。

今川先生のご経歴を簡単にご紹介いたしますと、1956年に外務省に入省されまして、マルセイユの日本国総領事、フランス日本国大使館の公使、タイの日本国大使館の公使などを務められました。そして、カンボジアの内戦が終結するという段階で、1991年にカンボジアの最高国民評議会担当大使に、1992年からは駐カンボジア日本国特命全権大使になられまして、ご活躍になったわけです。その後、1996年に外務省を退官されて、関東学園大学などで教鞭を執られました。

今日は貴重なお話しを伺える機会ですし、皆さんも、外交官やあるいは国際機関で働きたいという方もたくさんおられると思いますから、質問の時間もいただいておりますので、先生にどんどん質問してください。

では、今川先生、お願いいたします。

## ○今川幸雄・元駐カンボジア大使

ご紹介をいただきました、今川でございます。

昨日、私はこのCALEで、留学生の方々に、英語で講演をする機会を得まして、名古屋大学がアジア外交に必要なアジア諸国との文化交流、学

術交流に大変な役割を果たしていらっしゃるということを初めて知りました。今まで私がそういうことを知らなかったことを本当に恥じております。

今日は主として、学部学生さんの皆さんに、カンボジアのことをいろいろお話するように、というご要望をいただきました。ここに私が簡単に書いてきたレジюмеがございますので、このレジюмеに従ってお話いたします。



今川幸雄・元駐カンボジア大使の講演

ですけれども、その前に、この国際化の進んだ時代に名古屋大学で学んでおられる優秀な学生さんたちに、一つだけお願いしたいことがあります。人生においては、いろいろなこと、好きなことを大いになされば良いのですけれども、国際関係に興味のある方は、ぜひ外交官になっていただきたい、と思います。外務省には、大学の学部卒業以上の資格で、一般的な行政事務全般を扱ういわゆる「上級職」の試験というのがあります。それと

ともに、今はいわゆる「上級職」と全く同格の大学卒業資格になりましたが、「専門職」という、一般行政事務よりもむしろ特定の地域、特定の国の問題を、専門家として、外交官として処理する、そういう専門職の試験もごございます。私も、外務省で40年勤めた人間といたしましては、ぜひ優秀な後輩の方に来ていただきたい、と思います。国際問題に興味のある優秀な学生さんには、ぜひ外交官になっていただきたい。志のある方は、ぜひ挑戦していただきたいと思います。

外交官試験というのは、私のいた頃には、確かに偏っていました。私は早稲田大学の政治経済学部の政治学科の卒業ですが、当時、上級職は、ほとんどが東京大学卒業で、ほかに早稲田、慶応、一橋、京大、というような大学の出身者が若干でした。ですが、今は、上級職の試験も専門職の試験も、本当に多くの大学からたくさんの方が受験されています。名古屋大学でしたらもうトップの方の大学ですから、国際関係に関心のある方は、自分の力を試すだけでも良いので、ぜひ外務省の試験を受けていただけるとありがたいと思います。学生さんに外交官を勧めてくれと役所から頼まれたわけではないのですけれども、皆さんの顔を見ていたらどうしても言いたくなりましたので、最初に少しばかり余計なことを言いました。



## 2. 第二次世界大戦終了後のカンボジア

---

---

それで、「カンボジア和平の実現と文化の再興」について、お話しいたします。

カンボジアは、1953年11月に、ノロドム・シハヌークという当時の国王——この人は、何度も国王を辞めて、また国王になって、また辞めて、ということをした人ですけれども——この国王のもとで、フランスの保護国（Protectrate）から完全な独立国になりました。その後、このノロドム・シハヌークは、独立を達成したら、もう自分の国王としての仕事は終わったと言って、王様を辞めてしまいました。「陛下」から「殿下」つまりプリンスに戻って、17年間、政治の指導を続けた人です。17年間の後一時失脚し、後にまた復活するのですけれども。

このノロドム・シハヌークという人は、非常に独特の考えを持っている人です。彼は、「社会主義」ということを言うのですけれども、これが普通の社会主義とは違いまして、「王制社会主義」と言います。社会主義の考え方からすれば、論理の矛盾でもあるのですが、「王制社会主義」あるいは「仏教社会主義」ということを言いまして、それを国政の中心にします。「王制社会主義」あるいは「仏教社会主義」とは何かというと、国の体制としては王制をしっかり守っていく、そして仏教を国教としていく。マルクス・レーニン主義の社会主義ではなく、常識的に考えた社会主義というか、一般の人々、つまり特権階級だけではなくすべての人々の生活を向上させる、このことが社会主義だ、と彼は何度も繰り返し言っております。

して、実行しました。

他方、外交の面では、隣のベトナムでは既にフランスとベトナムとの戦争があり、その後、アメリカとベトナムとの戦争が続く、というように、戦争ばかり続いていました。シハヌークは、自分が政権の座にある間は絶対にこの戦火を自分の国に入れたい、と考えていました。そのために、当時は冷戦時代の始めて各国は東西両陣営に分かれていたわけですがそれでも、中立政策をとりました。つまり、アメリカなどの西側諸国とも仲良くするし、中国やソ連などの東側諸国とも仲良くするのは、口で言うのはともかく、実現するのはなかなか難しいことです。本当に、実現することは難しいのですが、シハヌーク殿下はこの中立政策をとり、1970年までの間、平和と安定、発展を維持してきました。

その間に、私は、1956年に外務省に入って、翌年にカンボジアにまいりました。これは余計な話なのですが、私は、外務省で最初に自分で「カンボジアへ行きたい」と言った人間です。外務省に入るとすぐに、研修所に入ります。大したこと教えてくれない、英語ばかり勉強させられて、あまり面白くなかったような気もしますが、その研修を6カ月だったか8カ月だったか、やります。その後、指導官という、だいたい外務省の参事官級の人が、「お前はどこに行きたいか」「将来は、どういう方面に進みたいか」ということを訊きます。当時は普通、みんなは「アメリカに行きたい」「イギリスに」「フランスに」と言うのですが、私は、みんなと同じではつまらないと思ったものですから、「東南アジアに行きたい」と言いました。そうしたら、その指導官が、「東南アジアに行って、どうするのだ。東南アジアというのは、みんな農民の国だ。日本も戦争に負けてまだ十数年しか経っていないが、その日本の生活よりも大変なのだ。将来はどうしても行かざるをえないこともあるだろうが、何も今、そうい

う所へ行かなくなつて」ということを言いました。人に言われるとすぐ反発してしまうのが私の悪いところでした、私は「いや、どうしても東南アジアに行きます」と言いました。指導官の方では、「では、アジアなら中国か韓国はどうか」と言いますので、「いや、中国や韓国は、指導官、東南アジアにはありません。東アジアです」と言って、「東南アジアというのは……」ということを経験官に向けて説教しまして、そしたらうんうんと言ってくれました。しかし、定員の問題もありまして、研修員を含めた各大使館の館員の数は、法律で決まっているわけです。その時に若干の空きがあったのは、今のミャンマー、当時はビルマですね、それからベトナム、そしてカンボジア、こんなものだね、ということでした。

私がそこで瞬間的に思ったことが、いくつかあります。そんなに、いちいち論理的に考えたわけではありませんけれども、1 つは、「カンボジアというのは『カボチャ』に似ていて、何かユーモラスではないか」ということです。それからもう1 つは、私が外務省に入ろうとした時のさらに3年近く前に、当時のノロドム・シハヌーク国王が日本にやってきました。日本は、1945年に第二次世界大戦で負けましたから、非常に困っていました。その時に、シハヌーク国王は、「日本から賠償を取るなんてとんでもないことだ」と言いました。もちろん、カンボジアも日本に侵略された国ですから、サンフランシスコ条約では賠償請求権はあるのですが、この賠償請求権を放棄する、ということを行いました。その頃は私も学生の頃ですけれども、シハヌーク国王の発言は日本の新聞でも大きく取り上げられましたし、衆議院で感謝決議をしたことなども思い出しました。それから、「歴史も文化もない国に行くのは嫌だな。しかし、詳しくはわからないけれども、カンボジアにはアンコール・トムとかアンコール・ワットといった大変な遺跡があるらしいから、これは面白そうだな」とも思いました。

た。

そんなことを、理屈で考えたのではないですけども、しっかり考えまして、「ぜひカンボジアに行かせてください」と言いました。すると、指導官はすっかり驚いて、「その3つの国の中でも一番貧困なのはカンボジアではないかな」と言いますから、私は「それでもいいですから、そこへ行かせてください」と重ねて言いました。「どうして」なんて訊かれましたが、「私は、カンボジアと聞いた時に、カンボジアに行きたくなったんです」と答えました。そうしたら、「うちの方とも相談して、明日までにちゃんと決めなさい」と言うのです。私はその頃24歳だったのですが、「もう成人ですから、親にそんなことを相談する必要はない。私は決めましたから『今川はカンボジア』と書いておいてください」と言って、帰って来てしまいました。それで、自分ではカンボジアに行くことに勝手に決めていたのですけれども、また呼び出されまして、「本当にいいのか」と。「本当にいいんだ」と答えますと、ようやく「そういうのもいいだろう」とか言われました。

そうして、私は1957年からカンボジアに行きました。今は、みんな、どこの国でも研修は2年なのですが、当時は3年間、フランスでもアメリカでもカンボジアでもベトナムでもどこでも、3年間は遊ばせてくれた、というと語弊がありますが、研修員をさせてくれました。私は、外務省で初めての、カンボジアに関する、今でいう「専門職」みたいなものです。カンボジアの専門家といえますか、カンボジアのことを勉強するために、研修員として派遣されました。それで、「もう帰ってこい」と言われても「なるべく長く置いてくれ」と言って、カンボジアには8年間いました。

その頃のカンボジアは、本当に綺麗な国でした。今のカンボジアをご存知の方が多いかと思えますけれども、車は多いし、物はいっぱいあるけれ

ども人はボサボサしている。その頃のカンボジアは、そんな所ではなくて、本当に綺麗な、緑の綺麗な、花の綺麗な、すばらしい所だったので。人はすぐ、「カンボジアは、昔、フランスの植民地政策の下におかれた貧困国だったところだ」なんて言いますけど。そうではなくて、これは、1953年に独立したカンボジアが、シハヌーク国王の指導の下に、美しい国づくり運動というのを始めて、みんなでつくったのです。たとえば、中国の人などは、物を食べると、よくペッペッと吐き捨てたりしていますが、カンボジア人も一緒でした。しかし、そういうことを絶対しないようにして、町を綺麗にしていました。東京の町よりも綺麗だったので。私は、カンボジアの生活がすっかり気に入ってしまいました。カンボジアはのんびりしていて、ですからあまり勉強はしなかったけれども、その3年間に100回ぐらいアンコール・ワットの遺跡を見に行ったりしました。



シハヌーク国王（当時、写真左）と著者。1995年、シェムリアップの王室別邸にて、アンコール遺跡保存修復の報告の際に撮影。

ただ、当時は、フランス語が公用語でした。憲法上はカンボジア語が公用語なのですが、使われているのはカンボジア語とフランス語で、公文書はほとんど全部フランス語でした。ですので、当時のカンボジアのエリートはみんな、フランス語を勉強しようとしていました。私は、東京でも大学は出たのですが、カンボジアの法科大学に2年間行きました。その法科大学の学生たちと一緒にカンボジアに旅行すると、学生たちが「今のあれは、何と書いてあるんだ。読んでくれ」と言うのです。彼らはフランス語しかできなくて、カンボジア語は読めない、そういう時代だったのです。

カンボジアは、このシハヌーク政権の間は、平和と安定を維持してきたのです。しかし、1970年に、ロンノルという人物——当時はシハヌークが国家元首で、その下にロンノルという首相兼国防相がいたのですが——がクーデターを起こしました。シハヌークは、いわば「飼い犬に手を噛まれた」とでもいいますか、自分の信頼していた部下にクーデターを起こされたのです。この部下は、アメリカの関係機関から買収されたとも言われています。

それで、このロンノルという人物が1970年にクーデターを起こして、それ以来約20年余り、カンボジアは非常に不幸な紛争の時代に入ります。独立以来17年間続いたシハヌーク政権が終わって、その後、アメリカに支援されたロンノル政権のクメール共和国という国になります。クメール共和国のロンノル政権を倒したのは、中国に支援されたポルポトという人物の一派です。ポルポトは本当に残忍非道な人物なのですが、彼が率いたのが、虐殺政権と非難される、民主カンプチア政権です。これが、いわゆる「赤いクメール」「クメール・ルージュ」の政権です。この民主カンプチア政権も4年くらい続きまして、その後また、今度はベトナムに

支援されたカンブチア人民共和国——これが今の政権の前身ですけれども——、ヘン・サムリン政権のカンブチア人民共和国という国になります。

このように、憲法に従って行なわれたのではない、武力による政権交代、政権奪取が3回もありまして、約20年間にわたり内戦と混乱の状況が続きました。

### 3. カンボジア和平パリ協定の成立

---

---

そして、これから和平の話です。

1987年12月2日、フランスのパリの東北東約120キロにある寒村のフェール・アン・タルドヌアというところにおきまして、シハヌークとフンセンとの間で話し合いが始まったのです。

シハヌークとフンセンは、カンボジア現地では厳しく対立し、殺し合っていた2つの大きな派閥のそれぞれの領袖です。2つの大きな派閥というのは、片方は、民主カンプチア連合政権／CGDK (Coalition Government of Democratic Kampuchea) と申します。これは、シハヌーク殿下がトップに飾り物として乗っかっていて、その下に、シハヌーク派、クメール・ルーージュ、それからソンサン派という親アメリカ系グループの3派による連合政権です。もう片方は、親ベトナムの、ソ連に支援されたカンプチア人民共和国政権です。この2つの派閥の両方が軍隊を持っているわけです。それで、カンボジアの現地においては、さんざん戦争をしていたのですが、遠いフランスのフェール・アン・タルドヌアというところで、シハヌークとフンセンとの間で話し合いが始まったのです。

私は、当時、南フランスのマルセイユで総領事をしていたのですが、この話を聞くや否や、東京に「私は、今からすぐ、パリを經由してフェール・アン・タルドヌアに行く」ということだけ電報を打って、どんどん行ってみたのです。古いシャトー・ホテルの2階で話し合いが行なわれていました。片方は、前国王であり、その当時は反ベトナムの三派連合の長である



シハヌーク、もう片方は、ベトナムに支援されていた人民革命党のフンセンです。フンセンは、現在まで首相をずっと続けています。私は、シャトー・ホテルの下で見ていたのですけれども、「殴り合いでもして、あるいは死傷者でも出たら危ないのではないか」と思っていました。この両者が話し合いを始めて、一向に話し合いが終わらず、12時を過ぎて1時になっても終わらない。私は、下のコーヒーショップで胃がおかしくなるぐらいコーヒーを飲んでいたので、もうだめだ」と思いました。そうしたら、そのうちに、調理場からいろいろな食べ物をどんどん2階へ運んでいくのが見えました。「これは、きっと一緒に食事をするのだな。それなら、話し合いはうまく行っているな」と私は思ったのですが、結局、そのとおりでした。



フンセン首相（写真右）と著者。

現地では殺し合いをしている2つの派閥の領袖が、話し合いをして、この最初の会合で話し合いが八分くらいうまく行った、これは本当に珍しい

ことなのです。カンボジア和平の最大の特徴は、カンボジア人同士の話し合いによって和平が始まったということです。アジアの国で、2つの勢力が、自ら話し合いをして、自ら紛争をやめようとする、そういう例は今まで、ベトナムにおいてもどこにおいても、ほとんどないと思います。外国が大いに力を入れて、外国の圧力によって、和平をし、あるいは戦争をするのです。カンボジアの場合は、シハヌーク前国王の話によりますと、シハヌークに対してはアメリカと中国から「話し合いなんかするな」と圧力がかかってきたけれども、彼はフンセンと話し合いをする道を選んだ。また、フンセンと話したところでは、フンセンはベトナムとソ連から「シハヌークなんかと話すなら協力をやめる」と言われた。それにもかかわらず、カンボジア人同士で話し合いをしたということ、これはすばらしいことでした。やはり、自分の国の将来は、自分の国民同士で話し合わないのだめなのです。カンボジア和平が最終的に成功した最大の原因は、カンボジア人自身による話し合いが行なわれ、それを国際社会が支援した、ということです。

今言いました、フランスのフェール・アン・タルドヌアで第1次のシハヌーク・フンセン会談が行なわれたのが1987年12月2日でしたが、その約2年後、1989年のことです。この年は、国際政治をやっている方は皆さん注目なさる年です。私も生きている間にこういう年がくるとは思わなかったのですが、この年は、冷戦——熱い戦争はしないにしても、お互いに相手の悪口ばかり言い合って、経済戦争それから情報戦争をやっていた——が終了し、東西両陣営の対立が解消した年です。カンボジア和平パリ会議より若干後のこととなりますが、この年の12月には、アメリカとソ連という両超大国の首脳が、つまりアメリカのブッシュ大統領——ブッシュ大統領は親子2人いますがお父さんの方です——と、ソ連のゴ

ルバチョフ大統領とが、地中海のマルタ島で、やはり直接に話し合いました。お互いに対立している陣営の首脳が話し合って、「もう冷戦をやめよう」「金ばかりかかって、核爆発の実験ばかりやるような冷戦をやめようではないか」ということを宣言しました。勝手なものですけれども。このように、1989年は、冷戦をやっていた親分同士が話し合いをした年でした。また、アジアでも、この年の始めから、それまで対立して喧嘩ばかりしていたタイと中国、ベトナムとの間の関係に、改善の動きが始まったのです。1989年というのは、これまたカンボジア和平のためのパリ会議が始まる年でもあるのですが、このように、国際環境はカンボジアの紛争解決のために非常に有利に働きました。

そして、この1989年の7月30日に、フランスが主催し、フランスのパリの外務省のクレペール国際会議場——日本人の感覚でいうと、まさに宮殿です——で、パリ会議が開催されました。カンボジアの4つの派——1つ目は、シハヌーク派。これは王制派です。2つ目は、ソンサン派。これは親米派です。それから、3つ目は、キュー・サンパン派。これは「クメール・ルージュ」と呼ばれる、親中国の、非常に評判の悪い、虐殺政権と言われる派です。それから、最後4つ目は、フンセン派。これはプノンペン政府とも呼ばれますが、その当時、現にプノンペンを支配していました——この4つの派の代表が参加しました。他に、国連安全保障理事会の常任理事国（いわゆる Permanent Five、P5）であるフランス、アメリカ、イギリス、中国それから当時のソ連や、ASEAN 東南アジア諸国連合の6カ国——当時、ASEANは6カ国でしたから——つまりインドネシア、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ブルネイ、それから、インドシナ半島のカンボジア以外の2カ国、つまりラオスとベトナム、それに、関係国ということで、日本、豪州、カナダ、インドと、それから、

非同盟諸国会議の議長国——これは、毎年変わって、1989年はジンバブエ、1991年はユーゴスラビア——という18カ国の代表が参加しました。カンボジアを入れると19カ国です。19カ国が参加して、カンボジア和平パリ国際会議——国際政治史などでは、通常、PICC (Paris International Conference on Cambodia) と呼ばれています——が開催されました。フランスとインドネシアが全体の共同議長国になりました。

それで、パリ会議は、2つの期に分かれて行ったのですが、最初に、18カ国の外務大臣と、カンボジアの4つの派の首脳が集まって、全体会議を行いました。これは2日間です。どこの国際会議でも、通常だいたい2日間です。全体会議には、各国の首席代表が集まります。首席代表というのは、たいてい外務大臣ですが、大きな会議の時などは総理大臣であることもあります。いずれにしても、そういう人は会議には長くいられないので、国際会議では、だいたい最初の2日間、長くても3日間だけ、全体会議というものが行われ、その後はずっと、いくつかの委員会に分かれて、委員会討議というのが行われます。そして、その委員会討議がまとまった段階で、また全体会議が行われます。この全体会議には、普通は、外務大臣または外務次官、あるいは、とても大事な問題であれば、総理大臣が来るわけです。カンボジア和平パリ国際会議の場合は、全体会議には、18カ国の外務大臣、それからカンボジアは4つの派の代表が参加して行なわれました。

そして、その後の委員会討議は、まず、軍事問題を扱う第1委員会というのが置かれました。共同議長は、インドとカナダです。各委員会には、18カ国の代表が全部参加します。次に、国際保障および政治問題を扱う第2委員会で、これは共同議長がマレーシアとラオスです。それから、難民帰還と復旧・復興問題を扱う第3委員会です。この第3委員会の共同

議長に、日本と豪州が選ばれました。第3委員会の共同議長は、日本は私で、オーストラリアはメリリーズという、外務貿易省次官補代理でした。

こうした委員会討議が、1カ月間、行われました。日本と豪州が共同議長を務める第3委員会だけは、全会一致で文章を採択して、成果を上げることができました。日本と豪州だけが成し遂げたというのは、日本外交において例のないことで、日本およびオーストラリアの外交の成功であったわけなのです。パリ会議全体では、主としてクメール・ルーージュが徹底的に抵抗し、妨害を行い、ほとんど成果を上げられなかったため、結局、8月30日にいったん中断されてしまいました。ここまでのパリ会議のことをパリ会議の第1会期と申しますが、この第1会期中に成果を上げることができたのは、日本と豪州が共同議長になった第3委員会だけだったのです。

そのときの会議の様子なのですが、ちょっと私の経験を話してみますと、午前中は、私が司会・議長をフランス語でやり、午後は、豪州のメリリーズが、彼はフランス語ができないので、英語でやったのです。各国の代表は、クメール・ルーージュを含めて、みんな英語もフランス語もできました。また、常に、カンボジア語、ロシア語、中国語を含めて、同時通訳がつくので、言葉の問題は全くなかったのです。けれども、クメール・ルーージュはすぐに手を挙げて、議事の進行について「質問がある」と言うのです。議事進行についての質問は優先的に答えなければならないので、仕様がなから質問させますと、同じことを何回も繰り返して言います。「ベトナムが悪い」「ベトナムはカンボジアに入ってきて、カンボジアを侵略している」「ベトナムの兵隊は軍服を捨てて農民服に替えて、それでカンボジアに入ってきている」「だから、このベトナムを断罪しない限り、カンボジアに平和はない」ということを、何回でも繰り返して言うわけなのです。

第1委員会も第2委員会も、そのような抵抗・妨害を「こんちくしょう」と思うのでしょうか、議長が何度も「やめろ」と言うのです。そうすると、クメール・ルージュは怒って、ますます、全く同じことを言うのです。「軍服を棄てて農民服を」なんて、馬鹿の一つ覚えで言うわけです。よく飽きずに言うものだなと。それだけ言うのではなくて、長い長い演説を始めるのです。原稿を中国が書いたかどうか知らないけれども、クメール・ルージュは、この世の中の悪夢のすべてはベトナムのせいだ、という言い方なのですね。



クメール・ルージュ政権下で虐殺された人々の頭蓋骨。プノンペン近郊のチューンエク（キリングフィールド）の慰霊塔にて撮影。

不思議なことに、カンボジアの内戦当時、アメリカはクメール・ルージュを支援していたのです。それから、中国もクメール・ルージュを支援していましたから、アメリカと中国とが一緒になっている。では日本はどうか

と言うと、公式には、やはりクメール・ルージュを支援していたのです。恥ずかしいことに、日本は1978年頃、クメール・ルージュの最後の時代に、西側諸国で唯一、クメール・ルージュのカンボジアに特命全権大使を派遣し、当時の昭和天皇がサインされた信任状を、キュー・サンパンという当時のカンボジアの名目上の国家元首に提出した国なのです。そんな馬鹿なことをどうして日本はやったのか。私は、これは日本の外交の汚点だと思います。西側の国は、アメリカの圧力があって、クメール・ルージュを正統政権として承認はしたのですけれども、それだけです。アメリカは、1973年にベトナムで完全に負けて、ベトナム和平をしてしまいましたから、ベトナムが憎くて憎くてしょうがないわけです。この点でクメール・ルージュと相通ずるものがあり、そしてクメール・ルージュを全面的に支持していた中国と一緒にあって、クメール・ルージュを支援したのです。日本は、ベトナム戦争の頃、ずっとアメリカに追随する外交をやってきた。そして、1972年に中国と国交を開いたのですが、『薄氷を履む』と言うか、日本と中国の間には非常にいろいろな問題がありますから、中国との外交を恐々進めていました。アメリカと中国とは政策がほとんど全部反対でした。日本は、アメリカの同盟国ですから、アメリカを支持する。すると、中国と国交正常化したにもかかわらず、中国との仲が険悪になってしまっただけでは困る。日本は非常に立場が苦しいわけです。ところが、クメール・ルージュに関しては、アメリカも中国も同じものを支援しているのです。アメリカもクメール・ルージュを支援して、中国もクメール・ルージュを支援する。だから、日本も支援する。これは、日本にとっては極めてイージーな外交なのですけれども、すぐに日本は行き過ぎてしまいました。1979年1月にクメール・ルージュ政権は崩壊していますから、1978年、クメール・ルージュ政権が崩壊する直前、当時の佐藤・中国大使を兼任でカンボ

ジア大使に任命して、クメール・ルージュが抑えていたプノンペンにやって、信任状を提出しているのです。当時の昭和天皇が署名された、「親しく仲良くやっていきましょう」ということの手書かれた信任状を出して。こういうのは西側では日本だけなのです。さすがのアメリカもフランスもどこもやってないことなのです。こういう外交の誤りというのは怖いのです。そのとき、新聞記者をいっぱい連れて行ったとみえて、その時の新聞を見ると笑ってしまうのですが、「佐藤大使がポルポト首相と親しく会見、今後の援助を約す」というのが、朝日新聞に出ています。そういうことがあって、カンボジア和平問題で日本は良いことをやったと外務省も一生懸命言っているのですが、和平問題に関しては全くそうだと思います。しかしその前は、全然違ったのです。

それで、カンボジア和平パリ会議が開かれて、私は、1カ月間、第3委員会の共同議長をやったのです。他の委員会はみんなクメール・ルージュが妨害してだめになったけれども、私はどうしたかと言いますと、メリリーズという豪州からの共同議長と相談をして、「あいつらに言いたいことを言わせよう。『言うな』と言うと必ず怒るのだから。そのかわり、どうせ疲れるから、そしたら『どうぞお休みください』と。こういこうではないか」と決めました。クメール・ルージュの外交官もみんな人間ですから、大声を上げて興奮して15分も話すと、疲れます。明らかに疲れが出たところで、議長であった私は、フランス語で「Your excellency representative of Mr. Khieu Samphan's faction.」、これはクメール・ルージュ代表への呼びかけでありますけれども、「お疲れでしょうから少し休まれたらいかがですか」と言いますと、彼は「助かった」というふうに座るのです。会議では、事務局と国連と国連開発計画／UNDP（United Nations Development Programme）と、それから共同議長が作った、み



んなに審議してもらおうための案があるのですが、それを、クメール・ルージュ代表が休んでいる間に、「次は、第3条、第4条、第5条、いいですね。はい、異議なし」と、どんどん進めていきます。第7条ぐらいになると、またクメール・ルージュが手を挙げて、また同じことを言うために、立ち上がるのですが、また言わせておくのです。話し始めて早いうちは、大声を上げて、みんなの注目の集まる場所で、自分自身が自分の声に興奮するのですが、60歳を過ぎたような人が多かったですし、15分か20分もしますとやはり疲れてしまうのです。それを見て、また「どうぞお休みください」と言うと、その「休んでくれ」という言葉を待っていたとばかりに座る。そこで、また今度は、「第8条、いいですね。第9条、異議なし。第10条……あ、このことですか。これはこうこうで、よし、異議なし」と、そういうふうやって、どんどん進めてしまいました。

結局、クメール・ルージュに妨害をさせておいて、向こうを疲れさせる、という戦法を取ったのは、この第3委員会だけだったのです。他の委員会もそういうふうになればいいのに、と私は言ったのですけれども、他の共同議長たちは「そんな妨害は許しておけない」とか「会議・委員会の権威を傷付ける」とか何とか言って、みんなクメール・ルージュにがんがん言うものですから、クメール・ルージュもますます興奮して反対して、結局、何もできなかった。そういうことがあって、1989年8月31日に、カンボジア和平パリ会議はいったん中断されました。

パリ会議が中断された後は、約2年2カ月の間、ニューヨーク、バンコク、東京などにおいて、多数国間外交または2国間外交で、カンボジア和平のための外交交渉が続けられました。これは、18カ国が会議に集まってということではなくて、あちこちで、4カ国、5カ国、あるいはせいぜい7、8カ国で話し合いをする、というやり方です。そして、1990年5

月には、東京で、シハヌークとフンセンが会談を行ないました。これは非常にうまくいって、和平交渉の核になる合意ができました。というのは、カンボジアが和平をして、国連の統治下におかれた場合でも、カンボジアには主権があり、独立しています。なので、国連がいくら暫定統治をしても、主権の存在する機関がなくなってしまうたら困るわけです。そこで、カンボジアの主権の存在するところとして、最高国民評議会——SNC (Supreme National Council) と言っております——を作るのですが、その構成が問題でした。それまでは、パリ会議の4つの派ということで、4派同数にしていたのですが、それは現実的ではない。シハヌーク側、すなわちシハヌーク派と、親米のソンサン派と、親中国のキュー・サンパン派つまりクメール・ルージュは、この3つが一緒になって民主カンボジア連合政権／CGDK (Coalition Government of Democratic Kampuchea) というのを作っていました。この三派亡命政権であるCGDKと、それからカンボジアを実効支配しているプノンペン政府——これは、結局、今日まで実効支配しているのですが——それぞれを6名ずつとする合意ができて、和平は大変な前進を見ました。それまで、パリ会議の4派の代表による最高国民評議会はできなかったのです。けれども、東京において、小和田という、当時の外務省の中では非常に頭の切れる外務次官が、フンセンと夜中まで話し合い、そして、その翌朝にはシハヌーク殿下の所に駆け込んで「こういうふうにする」と言いましたら、殿下も「そうやってくれ」ということになりました。ですので、パリ会議の構成が4派構成であったのに対して、その後のカンボジア和平はCGDK側とそれからプノンペン政府側との2派構成にしています。これは、結果的には、大変な前進をすることになりました。

そして、その翌年の1991年には、P5を中心に和平協定案の作成をし

たのですけれども、この P5、つまりアメリカ、イギリス、フランス、中国、当時のソ連が、日本も入れず豪州も入れずもちろんカンボジアも絶対に入れないで、話し合いをするわけです。これでカンボジアのすべての当事者が怒り出して、一時まただめになるかと思うこともありました。けれども、1989年の冷戦終了による国際的な緊張緩和の影響を受けて、カンボジアが怒ったこともあったけれども、和平の動きは好転しました。

1991年6月に、このときはやはりシハヌークとフンセンと2人だけの——最初の、フランスのフェール・アン・タルドヌアで1987年に行なった会合と同じように——シハヌークとフンセンと2人だけで、ジャカルタの非公式会談で話し合いました。そして、この2人の中で「こういうふうに和平をしよう」という合意ができてしまいました。1991年6月から、カンボジアの各派とP5との合意ができて——P5、常任理事国がOKしないと何も国際問題が動かないので——、10月21日からパリ会議が再開され、私もまた共同議長としてこれに参加しました。そして9月23日に、たった2日後ですが、「カンボジア紛争の包括的な政治解決に関する協定」を結びました。これが、通常、「パリ協定」あるいは「カンボジア和平パリ協定」と言われる協定で、「Peace agreements on Cambodia」というものです。「カンボジア紛争の包括的な政治解決に関する協定」が正式な名称です。「包括的」というのが大変な問題であって、部分的な解決は一切しないで、この協定をもって包括的な、つまり軍事、政治、経済、社会、すべての問題を解決するということです。そして、そのやり方は軍事解決ではなくて、あくまで政治交渉による政治解決だ、という協定を結びました。

この文書は4つありまして、4文書の署名が行なわれました。私はその4文書——今日持ってきてお見せするつもりだったのですが忘れてきて

しまいました——、全体は小さいものです。もちろん、各国の代表がサインした正本は立派な紙で作られた大きなもので、国連とフランスとインドネシアに永久保存されるのですが、それを印刷して、みんなに配った紙は小さなものです。

ありがたいことに、その第1文書の中に私の名前も「Mr. Yukio Imagawa (Japan)」と、それが第3委員会の共同議長をやったとちゃんと述べられていて、豪州のメリリーズもそこに出ています。こんなに大きな国際協定、国際条約で、個人の名前が条約の中に入るということは、めったにないことです。私もこのときは、もうこれで「外交官をやめても悔いはない」と思いました。私の個人的な感想で余計なことだけれども、外務省に入ってよかったなというか、外交官冥利に尽きるものだと思います。

こういうことで、パリ協定の4つの文書に署名が行なわれました。4つの文書というのは、まず、包括議定書というもの——普通は、総合議定書とか包括議定書とか呼ばれるものが必ずあるのです——があります。その次が、政治解決に関する協定。それから、カンボジアの主権、独立、領土の保全および不可侵ならびに国家の統一に関する協定。それから、復旧および復興に関する宣言。この政治解決に関する協定の後に、第三委員会が担当した難民および避難民の帰還に関する文書も、付属書として、付いております。

## 4. 国連の平和維持活動

---

---

カンボジア和平パリ協定に従って、カンボジアで、1992年3月15日から1年半にわたり——これは、協定上、初めから期限を切っているのです——国連の平和維持活動／PKO (Peacekeeping Operations) が行われました。

平和維持活動を行なうのは、国連カンボジア暫定統治機構／UNTAC (United Nations Transitional Authority in Cambodia) ですが、この代表がたまたま日本人でした。私は、当時はカンボジア最高国民評議会に対する日本政府代表である大使だったのですが、大使としては、どこの国の人間が来ようともそれに全面的に協力するつもりでいたのです。ですが、ありがたいことに、明石康さんという、英語はうまいのだけれども、秋田の人で、ちょっと秋田訛りのある日本語を話す人が、国連事務総長特別代表に任命されました。この明石康さんは、私は2、3日前にも会っている話をしたのですが、カンボジアでは「自分の国に平和をもたらしてくれた」と本当に神様のように言われている人です。しかし、この明石さんだけがやったのではなくて、世界中の国が「もうこれ以上、和平を壊してはいけない」ということで、みんな明石さんに協力しました。

この明石康・国連事務総長特別代表がカンボジアに来たのが3月15日なのですが、この3月15日に、1年半にわたるPKOがカンボジアで開始されました。UNTACによるPKOというのは、これは従来のPKOとは違って、文民が6,000人いました。普通、PKOは、軍人が主なの

です。6,000 人のうち、文民警察官、つまり憲兵や軍の警察官でない普通の警察官が 3,500 人いました。それから、軍人は 16,000 人いて、文民と合わせて計 22,000 人の国際職員を有する——これに加えてカンボジア人を雇いましたけれども——こんなに大きな PKO は未曾有のものでした。PKO は、1948 年くらいからしばしば、あちこちで行なわれてきたけれども、こんなに大規模なものが行なわれたのは初めてです。



紛争当事者の武器を回収する UNTAC。中央が明石康・国連事務総長特別代表（当時）。

この PKO の代表が選ばれる時に、パキスタン人の、こういう PKO などを担当していた国連事務次長がいて、その人がカンボジア和平にも関わっていたし、私も当然その人が代表になるのだと思っていました。しか

し、「カンボジアは難しいから、どうせやってもうまく行かないから、俺は嫌だ」と逃げられてしまいました。その第2候補というわけでもないですけれども、明石さんが、たまたま若いときにカンボジアに、わずかですが6カ月間だったか9カ月間だったか、カンボジアにいまして、シハヌーク前国王とも面識のある人だったので、明石さんがいいだろうということになって、明石さんは「それでいいですよ」ということで、来てくれました。私はカンボジア和平に外国（日本）からの大使として関わったので、代表はどこの国の人でも良かったのですが、日本人が国連事務総長特別代表としてカンボジアにおける UNTAC を全部引っ張って行った、カンボジアにおける PKO を実施したということは、私にとっては非常にやりやすくなった感じがしました。第一、言葉がよく通じます。これは本当にありがたいことでした。

UNTAC による PKO は、今言いましたように、大規模なものだったのです。UNTAC には、クメール・ルージュの妨害が非常に強かったのですが、クメール・ルージュはパリ協定には署名しているのです。国際的圧力もあったし、中国が圧力を加えてくれたということもありますが。それで PKO をやったのですが、クメール・ルージュは「武装解除も嫌だ」「動員解除も嫌だ」と言いました。みんな初めから協定に書いてあることなのです。それなのに、「武装解除・動員解除をやれば、自分たちは暴れる」ということで、これには本当に明石さんは困ったと思います。そこで、私も多少は相談に乗って、「明石さんがやることは、とにかく総選挙をしっかりとやって新しい政府を作ることだから、クメール・ルージュが嫌だ何だって言うのなら、武装解除や動員解除はやめよう」ということになりました。これは、カンボジアにおける PKO の採点をする場合に、20%か 30%、減点される部分です。パリ協定には、UNTAC の使命として、武装解除と

か動員解除ということがきちんと書いてあるのですけれども、これをやるとクメール・ルージュが暴れる。明石さんは、クメール・ルージュ以外の3派だけ武装解除してしまったら、クメール・ルージュの天下になってしまいますから、これまた危険極まりないこと。なので、クメール・ルージュは放っておく、そして選挙だけやる、という政策に変わりました。クメール・ルージュに対して「何々するな」と言って抑えると、彼らはまた暴れて人を殺したりするのですけれども、「もうお前たちには構わない」ということにしてしまうと、割と暴れなくなっていました。それで、総選挙を行なうことだけを最重要目標とする、と。これは、明石さんと私たち主要関係国大使とで相談して、そういうことになったのです。

それで、1993年5月に——この年はカンボジアにとって大変重要な年なのですが——カンボジア全土で、制憲議会選挙が行なわれました。選挙は、国連がやったのですから、自由かつ公正のうちに行われました。各国からたくさんの選挙監視員も来ました。私もずいぶん見て周りましたけれど、この選挙はとても立派に行われました。その結果、120名の議員から成る、憲法を制定する制憲議会ができて、その年の9月に新憲法草案が採択されました。そして、新憲法は9月24日に公布されました。

これも不思議な話ですが、カンボジアは、新憲法によって、民主的な立憲君主制の王国になった、王国が蘇ってしまったのです。我々諸外国の代表大使連中は、アメリカ、イギリス、フランス、我々みんな、「新しい憲法ができて、では、大統領選挙はいつやるのか」「大統領にはシハヌークがなるのかならないのか」、ということをしていました。でも、どうもフランスだけは、シハヌークとそっと話をしていたような形跡があるのですが。かつて王国であったカンボジアは、2つの共産主義、つまりクメール・ルージュの共産主義と、ベトナムから来たカンボジア人民共和国の共



産主義という、2つの共産主義の洗礼を受けてしまいました。そのカンボジアが、また王国に戻ることはありえない、可能性はない、と我々は思っていました。ですが、カンボジア人から選挙で120名の議員を選んで——その120名の中には、少ないですけども、クメール・ルージュ系の人もあるし、いろいろな人たちがいるのです。クメール・ルージュは選挙には参加しなかった、ボイコットしたのです。しかし、選挙で選ばれたクメール・ルージュ系も2、3人はいるのです——、その議員たちが全会一致で、王国に戻るということを決めてしまったのです。我々外国人には想像ができないことだったので、やはりカンボジア人は本当に王様好きで、シハヌークに限りない愛着を持っていたようです。UNTACは、120人の議員たちに「自分たちで憲法草案を考えろ」と言って、その様子を「一生懸命やっているからいいじゃないか」と傍らから見ていたら——場合によっては、たとえば共産主義化するとか、そんなことになればUNTACが何かやったでしょうけれど——、草案ができたなら、この2回の共産主義の洗礼を受けた国が、また王国に戻る、という憲法を採択してしまったのです。悪いことではありませんから、みんな反対はしなかったのですが、これは本当に不思議な話でした。

その結果、1つの派の指導者であったシハヌーク殿下、1944年から1953年3月まで国王で、その後はずっと国家元首でいて、和平過程ではSNC議長になったシハヌーク殿下が、国王に再即位して、つまり国王陛下になってしまって、新政府が誕生しました。憲法制定のための議会である制憲議会は、立法機関に移行する、普通の衆議院のようなものになりました。そして、UNTACは同日付けで任務を終了して、カンボジアから出ていきました。

では、カンボジアの和平過程が成功を収めた要因は何か、ということに

ついてお話しします。20 世紀末の、冷戦の終了時期にやったということも良かったのですが、第1に、この武力を使わずに政治力だけで行った交渉による和平のイニシャチブが、カンボジア人自身により取られたこと——先ほど何度も言いましたように、シハヌークとフンセンとの会合によってそのイニシャチブが取られました——、国際社会はこれを横から支援し、決して上から押し付けようとしなかったことです。和平交渉というのはだいたい、中東に関してもどこに関しても、大国が上から「これを飲め」ということで、いろいろ押し付けるのです。カンボジアではそれをやらなかったですから、非常に良かった。



憲法定後、明石康・国連事務総長特別代表（当時、写真前列左から3人目）を囲むカンボジア政府新聞僚と外交団。

それから、第2に、「カンボジア紛争の包括的な政治解決に関する協定」という、和平の基礎となる、しっかりした国際文書があったということで

す。

さらに、第3に、私は日本人であるからこれは言いたいのですが、従来はアジアの地域紛争解決に極めて冷淡で消極的であった日本が、初めて積極的にカンボジア和平の過程に参加したことが挙げられます。皆さんまだお若い方ですから、もちろんご存知ないでしょうが、1945年8月に日本は第二次世界大戦に負けまして、それ以来、日本はこういう、カンボジア和平に参加するようなことは、一度もやったことがなかったのです。インドシナ戦争、つまりフランスとベトナムとの戦争が終わったときの1954年のジュネーブ会議や、たぶん1962年だったと思いますが、ラオス問題——ラオスもまた4派の大喧嘩が続いていたのです——のためのジュネーブ会議、それから、これは日本は参加できなくて大いに失望したのですけれども、ベトナム戦争が終わって、ベトナムとアメリカとの間の和平協定ができて、その協定を国際的に承認するためのベトナム和平の国際的保障のためのパリ会議といったものがありました。こういう大きな会議に日本は一度も呼ばれたこともないし、呼ばれないから参加したこともない。日本はそういうことに興味も示さない。表向きではなく下のほうからそっと打診はありましたが、何を言っても日本は「ノー」というものですから、日本はそういう場へ呼ばれたことがなかったのです。

カンボジア和平パリ会議が動き出した頃は、私は大使になる前の参事官級だったのですけれども、「日本は、これに参加しなかったら、アジアにおける外交的立場を全て失う」ということをワーワー言ったのですが、日本の外務省自身が「大いにやろう」ということで動いてくれたから、私は非常に良かったと思っています。

## 5. カンボジア和平への日本の貢献

---

---

話が少し長くなってしまいましたが、「カンボジア和平への日本の貢献」について、簡単に説明します。

カンボジア和平パリ会議に日本が参加したことは、第二次世界大戦終了後の日本が、初めて、アジアにおける第三国の紛争解決のための国際行動に積極的に関与したものです。しかも、単に会議に参加しただけではなく、日本は豪州とともに第3委員会の共同議長に選出されました。私と、豪州のメリリーズ外務貿易省次官補代理が、共同議長の役割を確実に果たすことができたのですが、戦後日本外交史上、特筆されることは、日本が参加したことです。

さらに、日本政府は、パリ協定に従って実施された、国連カンボジア暫定統治機構——明石さんの主導する UNTAC——による平和維持活動に、初めて、陸上自衛隊の施設大隊1,200名を、600人を半年ずつ2回ですが、派遣しました。それから、停戦監視幹部陸上自衛官も、2回に分けて8名ずつで、計16名を派遣しました。それから、文民警察官——これは、都道府県警察の警察官を東京の警察庁に集めて、警察庁から派遣したのですが——75名を派遣しました。さらに制憲議会議員選挙の時、選挙監視要員41名を派遣して、UNTACに協力をいたしました。

この時は、日本では、「カンボジアの PKO に参加すべきではない」という意見も、当時の日本社会党など多くの方々から述べられ、やはり国論も2つに分かれていました。日本は、戦争には絶対に軍隊出さない、とい

うのは当たり前のことなのですが、PKO というのは戦争をするためではまったくありません。武器は、自衛隊は国際的に見れば軍隊ですから、自衛のためには持っていきます。けれども、日本はほとんど持っていかなかった。たくさん持っていった国もあります。けれども、武器を使って相手を攻撃するという事は、まずやらない。自衛のためだけに武器を使うということで、あくまで平和を実現させるために行う。このことは、国連の規則にもはっきり書いてあります。「そういうものですからいいじゃないか。国際協力をしなきゃだめだ」という意見と、「これは、日本がやがて戦争するために海外へ派兵する、その最初になる。日本国内から、いかなる意味においても、自衛隊を海外に出しちゃだめだ」という意見と、両方がありました。両方とも、必ずしも政治的に偏っているわけではなく、本当にいろいろ心配して、「国際協力が大事だ」という意見も、「日本の国内が大事だ」という意見も、いろいろ意見はあったのです。けれども、思いきって私の立場からいうと、日本が PKO に参加してくれたことは、ありがたかったと思います。



PKO に派遣された陸上自衛隊施設大隊を視察するソクアン・カンボジア政府官房長官（写真中央）と著者（その左）。

日本は、さらに、カンボジア和平の実現のために軍事的・政治的問題のみならず、経済の復旧・復興が必要であるという考えから、パリ会議の第3委員会において、カンボジア復興国際委員会／ICORC（International Committee on the Reconstruction of Cambodia）の設立を提唱して、成功しました。和平協定の第3文書であるカンボジアの復興・復旧に関する宣言に、これが取り上げられています。



日本の援助によるプノンペン市発電所修復工事の完成式にて、テープカットするシハヌーク国王（写真中央）と著者（その右）。1994年撮影。

和平協定に署名した後、UNTACによるPKOが開始されてから3カ月後の1992年6月に、東京において、「カンボジア復興閣僚級国際会議」という会議を開催しました。「閣僚級」なので、多くの国は財務大臣、経済大臣、または外務大臣を派遣してくれました。この会議を日本が主催し、

東京で、日本と国連開発計画／UNDP とが共同議長となって、日本とカンボジアを含む 34 カ国と、それから UNDP と UNTAC を含む 13 の国際機関が参加しました。会議は、合計 8 億 8,000 万米ドル——当時としては大変大きな金です——の拠出約束を集めまして、また、日本とフランスを共同議長として、東京とパリで毎年交互に、カンボジア復興国際委員会を開催する合意も成立しました。なにしろお金がたくさん集まったものですから、大変な成功でした。

こうして、日本は、カンボジア経済の復旧・復興のために、フランスとともに主導権を握るようになりました。そして、今日まで 18 年間にわたりカンボジアに対する最大の政府開発援助／ODA の供給国——その後、中国よりも少なくなってしまうかもしれませんが——になっております。

## 6. クメール文化の復興と日本の貢献

---

---

以上のことに加えて、文化の復興の問題——私はこのことをよくお話しるのですけれども——について、簡単にお話をしたいと思います。

政治・軍事といったハードパワーによって国際問題を解決する時代は、やはり、もう過ぎたと思います。もちろん、政治・軍事というハードパワーが必要なときは必要なのですが、それ以上に、文化というソフトパワーが大切だということを知っていただきたいと思うのです。

クメール民族の文化遺産であるアンコール遺跡は、20年あまりに及ぶカンボジアの内乱と紛争によっていわば放置されていたため、危機的な状況にありました。しかし、和平協定署名後の1992年に、UNESCOの呼びかけにより、日本の平山郁夫教授や石澤良昭教授ら専門家の協力を得て、世界遺産に登録されました。日本は、そのために大きな働きをしました。

そして、その後、国連によるPKO活動が実施中であった1993年、日本政府は、カンボジア経済の復旧・復興と同様に、カンボジアにおける文化の再興についても、日本が、フランスと協力して、主導的役割を果たそうとしました。この1993年の3月以来、日本とフランスとは大使の間で——当時、日本の大使は私だったのですが——協議を続けました。プノンペンのUNESCO代表部で開かれた「アンコール遺跡保存修復のための関係国非公式会合」というものがありました。私と、当時のコスト・フランス大使が共同議長となって、大卒の合意を成立させるよう努力しました。ですけれども、先ほど申しましたように、制憲議会議員選挙を目前にして



UNTAC に対するクメール・ルージュの反抗が厳しくなってきた、あちこちで治安が悪くなり、協議の進展が阻まれたのです。日本の場合も、この年の 4 月に、国連ボランティアの中田厚仁さんという、若い、24 歳の、大変いい青年だった方ですけれど、殉職されてしまいました。5 月には、文民警察官の高田警部補——当時は警部補で、殉職後に警視になられた方です——が、殉職されてしまいました。総選挙施行の直前には、非常に治安が悪くなってしまい、一時は文化の復興についての話し合いをするどころの騒ぎではなくなっていました。

ですが、制憲議会が発足して、この年の 8 月に入ると、日本とフランスの大使、カンボジア側のシリウット外相、それから、ヴァンモリヴァン国務相とが、アンコール遺跡保存修復に関する話し合いを再開しました。在プノンペン外交団と意見交換を重ね、意見の一致をみて、1993 年 9 月 24 日の新憲法公布・王制復帰、そして新政府の成立の直後の 10 月に、東京において、日本政府の主催により、会合を行いました。カンボジアからは、シハヌーク国王の第 1 王女ボパデビ殿下を国王代表に迎えました。この方は、カンボジアダンスのトップバレリーナだった人ですが、当時はたまたま文化大臣でした。それから、ヴァンモリヴァン国務大臣を政府代表に迎えました。この人は、カンボジア第一のアンコール遺跡の研究者です。彼らカンボジア代表団に加え、UNESCO、それから、各国代表が参加して、「アンコール遺跡救済国際会議閣僚レベル・セッション」を開催して、プノンペンで、日仏大使を共同議長とする、「アンコール救済国際協力調整委員会」を設立するという基本方針について合意が成立しました。

アンコール遺跡の修復は、その基本方針に従ったやり方で、今日まで、日本がフランスと一緒にやっております。若干、フランスに先を越されてしまっているのですけれども。早稲田大学の中川武教授と、それか

ら、上智大学の石澤良昭教授が、2つの別の団を率いて、アンコール遺跡の修復に、今でも活躍しておられます。そして、その他に、日本の大学や学術研究所の中でも、奈良文化財研究所、金沢大学、日本大学等が、アンコール遺跡の修復のためには、ずいぶんいろいろとやっています。また、その他の人材育成もやっておられます。

それで、本当に申し訳ないのですが、アンコール遺跡の保存修復だけではなく、名古屋大学で文科系のたくさんの留学生を迎えられて国際交流を行っていただけることを、私は知りませんでした。これはすごいことですよね。昨日は留学生のみなさんにお目にかかったのですが、名古屋大学が、法整備の支援ということで、法学部その他の文科系学部を含めて、このようにたくさんの東南アジアの国々の留学生も招いて、交流をやっておられることを知らなかったことは誠に申し訳なかったと思っています。明日、私は、「日本アセアンセンター」という、東京にある国際機関で、今お話したようなことを話さないといけないのですが、明日は、この名古屋大学の国際交流について、大いに話をしたいと思っています。

時間がもうほとんどなくなっちゃってしまいましたけれども、以上で私の話を終わらせていただきます。なお、先ほど申しましたように、ぜひ皆さんにも、カンボジアに興味を持っていただければありがたいし、カンボジアだけではなくても東南アジアに興味を持っていただけたらありがたいですし、志ある方はぜひ外交官になってほしいと思います。

どうもありがとうございました。

## 7. 質疑

---

---

### ○司会

貴重なお話を、どうもありがとうございました。

では、時間が若干ありますので、皆さんの方から質問がありましたら、手を挙げてください。どうですか。

### ○質問者

和平の交渉において、大国からの圧力があることもあるとおっしゃいましたけれども、まさしくそういう和平の交渉の場にいらっしゃった立場の今川先生から見て、そういう圧力は、具体的にどういう形で与えられたのでしょうか。

### ○今川

ベトナム和平のパリ会議などでは、会議を取り仕切る役がありました。アメリカとソ連とか、あるいはフランスと中国とかです。そういった国々が圧力をどんどんかけるのは普通です。

カンボジア和平パリ会議は、まったくそれと違いました。初めから主導権を握ってしまったのが、フランスと、日本と、オーストラリアと、それから、タイと——当時のタイのチャチャイ政権ですが——、それから、あと1つインドネシアです。この5カ国が中心となって、主導権を握りました。フランスが一步先をいったこともありますけれども。フランス以

外の大国、つまり国連安全保障理事会の常任理事国がないわけですから、パリ会議の間は、圧力は無かったです。仮に、いろいろな圧力があっても吹き飛ばしてしまうつもりはありました。

しかし、カンボジア和平パリ会議の第1会期が終わってから第2会期に至るまでの約2年間は、パリ会議で自分たちが無視されたと思った、フランスを除く4カ国は「ここで主導権を握らなくちゃならない」というので、ニューヨークとパリで彼らだけで交渉を始めました。国際社会なんて、かなり子どもの喧嘩みたいのところありますから。そして、その交渉結果を、日本、豪州、タイ、インドネシア等に押しつけようとしたことは事実です。

しかし、カンボジア和平パリ会議の場合がそうなのですが、最初に動き出したときに主導権を握った国は強いのです。また、カンボジア和平パリ会議の場合、幸いなことに、フランスは常任理事国の中でもっとも力が弱いですから、フランスは自分がP5の一員であり、あるいはP5のメンツを立てようという気がないのです。

和平会議が中断されている期間、一時的には、確かに圧力はあったと思います。しかし、和平会議が中断されていても「和平会議」という組織はあるわけです。ただ、会議に集まらないだけです。この幽霊みたいな組織があるものですから、アメリカにせよ、中国にせよ、あるいはソ連にせよ、圧力をかけたくてもなかなかかけられない状況がありました。

そして、圧力をかけるときは、彼らはカンボジア人を入れないでやるのですよ。常任理事国の5カ国というのは、だいたい、常任理事国だけで話し合いをする癖がついている。そこで、カンボジアの、クメール・ルージュを含む4つの派のみんなから反対の声が挙がりました。それを見て、我々は、言葉は悪いけれど「それみろ」というような感じでした。「だから、

我々がやらなければ、だめなのだ」と。

また、確かにおっしゃるような圧力が加わりますけれど、その圧力によってグシャッとなってしまうようでは、少なくとも、21世紀の外交はだめだ、と思います。もちろん、大国だって、馬鹿なことばかり言っているわけではなくて、それなりに理屈のあることもあります。現実的に力の世界である外交というものを見た場合に、既成の観念に捕らわれて、大きい国だから、強い国だから、その国の言うことは聞かざるを得ない、ということをやっていたら、進展が全然ありません。この、20世紀最後に行われたカンボジア和平パリ会議は、それ以前の、常任理事国5カ国があくまで主導するようなやり方とは違った方向に動き出すきっかけになったと思っております。

## ○司会

今日は貴重なお話をお聞かせいただいて、新しく国際政治をみる目が開かれたと思いますので、感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

< 著者 >

今川 幸雄 *IMAGAWA Yukio*



1932 年生まれ。1955 年早稲田大学政経学部卒業。1956 年外務省入省。カンボジア、フランス、ラオス、アルジェリア等での勤務の後、在フランス公使、在タイ公使を歴任。1991 年在カンボジア最高国民評議会担当大使、1992 年駐カンボジア大使。1996 年退官。関東学園大学名誉教授。

CALE BOOKLET No. 4

カンボジア和平の実現と文化の復興

著者 いまがわ ゆきお  
今川 幸雄

発行 名古屋大学法政国際教育協力研究センター(CALE)  
464-8601 名古屋市千種区不老町  
電話: 052-789-2325 Fax: 052-789-4902  
<http://cale.law.nagoya-u.ac.jp>

発行日 2013 年 3 月 15 日

印刷・製本 名古屋大学消費生活協同組合印刷部

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。



